

過剰な二人

林 真理子 × 見城 徹

講談社

過
剩
な
二
人

林真理子
見城徹

講談社

過剰な二人 かじょう ふたり

二〇一五年九月二九日 第一刷発行

著者
林 真理子 はやし まりこ

見城 徹 けんじょう とおる

© Mariko Hayashi, Toru Kenjo 2015, Printed in Japan

発行者
鈴木 哲

発行所
株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二二 郵便番号 一〇二一八〇〇一
電話 編集 〇三三三九五三三二二
販売 〇三三三九五三四一五

業務 〇三三三九五三六一五

印刷所
慶昌堂印刷株式会社

製本所
株式会社国宝社



本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは第一事業局企画部あてにお願いいたします。

ISBN978-4-06-219710-6

定価はカバーに表示しております。

過剰な二人／目次



対談 過剰な二人の「失われた16年」 12

第一章 人生を挽回する方法

人間関係にはちょっとしたコツがある

コンプレックスを仕事に生かせ

相手にうまく乗せられることの大事さ

自分の資質をなるべく早く見極めよ

パートナーを信じることで結果が得られる

細かいことにこだわり抜け

スランプの過ごし方で、未来は決まる

オタクと呼ばれることを恐れるな

批判する時に気を付けるべきこと

林

30

見城

35

林

40

見城

45

林

50

見城

55

林

60

見城

65

林

70

他者への想像力を育め

見城

75

第二章 人は仕事で成長する

仕事ほど人を成長させてくれるものはない

林

82

モテたい気持ちを、いつまでも大切にせよ

見城

87

妄想力を仕事に生かす

林

92

恋愛を制する者は仕事も制する

見城

97

上司を味方につける方法

林

102

トラブル処理は最高の勉強である

見城

107

化ける時は必ず悪口を言われるものだ

林

112

天才から発想を盗み取れ

見城

117

中身より外見が大事

林

123

何かに熱中すれば、必ず実りがある

見城

128

第三章 最後に勝つための作戦

人がやりそうにないことをやる

人の心をつかむには圧倒的努力しかない

未来の自分をはっきりと想像する

ビギナーズラックを信じよ

誰かに褒められたことを思い出す

自分の好きなことを仕事にせよ

目立つために空いている場所をねらう

人ができないことをするのが好き

お金がなくても、みじめにならない方法

内なる声に耳を澄ませ

林

134

見城

139

林

144

見城

148

林

153

見城

158

林

163

見城

168

林

173

見城

178

第四章 「運」をつかむために必要なこと

身の程を知りすぎるな

林

184

無知ほど強い力はない

見城

189

運はコントロールできる

林

194

負けを、簡単に認めるな

見城

199

会社の辞め時を見極める

林

204

人生の正念場には、覚悟を決めて立ち向かえ

見城

209

ここ一番の勝負時は、恥を捨てる

林

213

本当の覚悟は、誰かの一押しで決まる

見城

218

「自分は何者でもない」という考えを持つ

林

223

仕事は辛くて当然と思え

見城

228

まえがき

見城 徹

林真理子と初めて出会ってから30年以上が過ぎた。今もその時の光景はくっきりと頭の中に残っている。

待ち合わせた六本木の喫茶店「ルコント」の2階には、客は僕一人しかいなかった。

僕はオレンジジュースを飲みながら、林真理子を待っていた。

古い作りの階段が、ミシッ、ミシッと音がして、ジーパンをはいた林真理子が入ってきた。

その時、音を立てて林真理子と僕の運命も交錯したのだ。

それから10年、たぶん林真理子と最も多く仕事をした編集者は僕だったに違いない。

林真理子は次々とエッセイのベストセラーを出版し、初めて書いた短編小説が直木賞の候補になり、やがて直木賞を受賞した。

いくつかの恋愛をして、結婚をした。

そのすべてに僕は深く関与している。

つまり、林真理子がいなければ編集者・見城徹は今の形で存在しなかったかもしれないし、僕がいなければ作家・林真理子も存在しなかったかもしれない。

それを運命と呼ばずして他に何と呼ぼう。

僕が角川書店を辞め、幻冬舎を作って1年もしないうちに、二人は絶縁関係に入る。それが16年も続くことになるとは、その時は思ってもいなかった。喧嘩はよくしていたが、大抵は2〜3日で関係は元に戻った。

空白の16年。僕の心は、いつも晴れていなかった気がする。その間、何度か偶然に遭遇し、二人は目を背け合った。

そんなある日、札幌で「渡辺淳一文学館」の盛大な立食パーティーが催された。僕は出版社の社長として、林真理子は渡辺淳一さんの友人の作家代表として、ホテルの

広い宴会場の中にいた。

僕はその時、遠くのテーブルに佇む着物姿の林真理子を見ながら、この時を逃しては、永遠に彼女と仲直りできるチャンスはないと、何かに撃たれるように強く思った。

傍らにいた、林真理子と親交のある男性に、「見城がどうしてもお詫びをしたいので、そちらに出向くのを受けて頂けませんか」という伝言を託した。

その男性が、彼女の答えを持って帰ってくるより先に、僕の目の前に林真理子が立っていた。

「私が来るべきだと思いました、見城さん」

その瞬間から、16年の時を経て、また、二人の関係は始まった。

本書の冒頭に収録された二人の対談は、僕がゲストに呼んでくれと希望して、「週刊朝日」誌上で実現したものだ。

秋元康をはじめ多くの方々から、あんなに面白い対談はなかったとお褒めの言葉を頂いた。その反響の大きさを知っていた講談社の編集者・原田隆から、二人の関係を本にしようという話が持ち込まれた。最初は本になるのかと半信半疑だったが、始め

てみると次々といろんなことが思い出された。

林真理子から講談社を経由して届けられる原稿は僕を刺激し、僕の40年に及ぶ編集者生活を振り返る、いいきっかけにもなった。

現役の作家と現役の編集者がこのような本を出すのも、面白いかもしれないと自分に言い聞かせて、ユニークな本が出来上がったと自負している。

人生論として読んで頂いても結構だし、大ベストセラーになった林真理子の『野心のすすめ』のサイドストーリーとして読んで頂くのも一興かもしれない。

僕としては覚悟の一冊である。

あとは読者が楽しんでくれれば、これに勝る幸せはない。

過剰な二人／目次



対談 過剰な二人の「失われた16年」 12

第一章 人生を挽回する方法

人間関係にはちょっとしたコツがある

林

30

コンプレックスを仕事に生かせ

見城

35

相手にうまく乗せられることの大事さ

林

40

自分の資質をなるべく早く見極めよ

見城

45

パートナーを信じることで結果が得られる

林

50

細かいことにこだわり抜け

見城

55

スランプの過ごし方で、未来は決まる

林

60

オタクと呼ばれることを恐れるな

見城

65

批判する時に気を付けるべきこと

林

70

他者への想像力を育め

見城

75

第二章 人は仕事で成長する

仕事ほど人を成長させてくれるものはない

林

82

モチたい気持ちを、いつまでも大切にせよ

見城

87

妄想力を仕事に生かす

林

92

恋愛を制する者は仕事も制する

見城

97

上司を味方につける方法

林

102

トラブル処理は最高の勉強である

見城

107

化ける時は必ず悪口を言われるものだ

林

112

天才から発想を盗み取れ

見城

117

中身より外見が大事

林

123

何かに熱中すれば、必ず実りがある

見城

128

第三章 最後に勝つための作戦

人がやりそうにないことをやる

林

134

人の心をつかむには圧倒的努力しかない

見城

139

未来の自分をはっきりと想像する

林

144

ビギナーズラックを信じよ

見城

148

誰かに褒められたことを思い出す

林

153

自分の好きなことを仕事にせよ

見城

158

目立つために空いている場所をねらう

林

163

人ができないことをするのが好き

見城

168

お金がなくても、みじめにならない方法

林

173

内なる声に耳を澄ませ

見城

178

第四章 「運」をつかむために必要なこと

身の程を知りすぎるな

林

184

無知ほど強い力はない

見城

189

運はコントロールできる

林

194

負けを、簡単に認めるな

見城

199

会社の辞め時を見極める

林

204

人生の正念場には、覚悟を決めて立ち向かえ

見城

209

ここ一番の勝負時は、恥を捨てる

林

213

本当の覚悟は、誰かの一押しで決まる

見城

218

「自分は何者でもない」という考えを持つ

林

223

仕事は辛くて当然と思え

見城

228